

「弾く、聴く、読む」クラシックギター愛好家のため
ギタードリーム

Guitardream

掲載楽譜収録!! CD付

チャーチル / いつか王子様が
カーン / 煙が目にしみる
佐藤弘和 / 約束、感謝
グリーグ / 朝、オーゼの死
ティラー / 傘を忘れないでね!
ビゼー / 真珠採り
吉俣 良 / 江～姫たちの戦国～テーマ

今月の楽譜

来日特別インタビュー
ミロシュ

レポート
**第2回イーストエンド
国際ギターフェスティバル**

話題のアーティスト

中林伸哉

クラブ・マリアデュオ 今日も元気
ギターカラオケ
マリオ鈴木

33

No. MAR-APR 2012

Duo Palissandre デュオ
パリサンドル

HOMA
dream

デュオ・パリサンドル

Duo Palissandre



聞き手：玉置義弘
通訳：樋浦靖児
構成：松元祥
写真：Arnele Hubernet, Alain Gariteai, Lionel Hug
Duo Palissandre : Interview by Yoshihiro Tamaki

イエ、ドビュッシー、フォーレ、ティエリー・ルジェ
Thierry Rougier…と、1本の線でつながるようにしたりね。

——29日にもそのルジェの《E Oc!》という曲を弾きましたね。ルジェというのは、どんな作曲家なのですか？

V ポルドーの近くに住んでいる作曲家で、ギタリストであり音楽学者でもある人物です。いろいろな音楽に精通していて、とくに伝統的な音楽のメロディーやリズムなどを取り入れて作曲するのが彼のスタイルですね。

《E Oc!》には、フランス南西部ガスコンの伝統的な音楽の要素がいろいろ入っています。「E Oc」というのは方言のようなもので、フランス語の「ウイ」に当たる言葉なんです。

Y ルジェは長いことセルソ・マシャードとギターデュオを組んでいたから、デュオのことを熟知しているんだ。

そもそもマシャードをヨーロッパに紹介したのも彼。ブラジルでマシャードを見出で、フランスの音楽セミナーに連れて來た。そのセミナーは、アルバロ・ピエッリやパブロ・マルケス、ホルヘ・マルティネス・サラーテらが講師や演奏者として参加しているフェスティバルのようなもので、それをきっかけにマシャードは世に知られるようになったんだ。

——《E Oc!》は出版されているのですか？

Y いや、未出版。あの曲は1980年に作曲されて以来、まったく弾かれていなかつたんだ。私たちは10年ぐらい前にルジェに自筆譜をもらつたんだけど、当時はいろいろなコンクールに出ている頃だったから、

弾く時間がなかつた。でも、しばらくたって練習してみたら面白くて、それ以来弾いている。

V その後、ルジェが「気に入らない箇所があるから直したい」と言ってきたんです。だから、変わつた所を練習し直して、CDに録音しました。すると、彼はそれを聴いてまた最後の部分を書き直してきた（笑）。29日に弾いたのがその最後のバージョン。

Y 私たちは、もうこれで決定稿ということにしたいんだけれどね（笑）。

——ウルクズノフ《反射》以外はすべて暗譜で弾きましたが、いつも暗譜で演奏しているのですか？

Y そうだね。暗譜は私たちにとってはもう習慣になっている。アンサンブルする時には、お互いの動きを見ながら弾かないと合わせられないからね。譜面で弾くと、目はずつと楽譜のほうに向いているわけだから、呼吸がずれたりしてしまう。

《反射》は去年に書かれた曲で、何ヶ月か前に弾き始めたばかりだから、まだ覚えていないだけなんだ。もちろん、そのうち暗譜で弾くつもり。ウルクズノフのほかの曲だってそうしているしね。

——デュオ・パリサンドルのレパートリーはどのぐらいあるのですか？

Y わからないなあ（笑）。踊りと一緒に演奏したり、ピアノデュオとやつたりもするから、そのための曲もあるしね。たとえばピアソラ《タンゴ組曲》《リベルタンゴ》《フーガと神秘》、ファリヤの舞曲とか。

V ピアノデュオの名前は「アイボリー Ivorie」で、私たちはパリサンドル（笑）。

——編曲する時はどのようにしているのですか？



有名な演奏家のコンサートに出かけて、その演奏を楽しむのもよいが、未知の音楽家の演奏会に出かけ、そこで出会った音楽が素晴らしいものであつたら、これ以上の幸せはないと思う。今回のヴァネッサ・ダルティエとヤン・デュフレーンの2人、デュオ・パリサンドルとの出会いは、まさしく後者のほうだった。

初来日であり、ボルドー（フランス）のギターデュオという以外に彼らについての情報は乏しく、フランス以外での活動歴も華々しくはない。私の手元にも、これまでにリリースされた2枚のCDのうち1枚があつただけである。しかし、実際にデュオ・パリサンドルの演奏を聴き、彼らが間違いなく、現在最高峰にいるギターデュオであることを確信した。

派手なパフォーマンスはないが、彼らの紡ぎ出す音楽は本物。今回の来日では演奏回数が少なく、多くの人に聴いてもらう機会があまりなかったのは実に残念。そこで、少しでも彼らを知ってもらうために、今回のインタビューではプロフィールを中心に語ってもらった。

フェスティバル翌々日の早朝にはフランスに帰国するという慌ただしいスケジュールの中、都内観光に向かう途中、快くインタビューにこたえてくれたことに感謝したい。



Armelle Duberne

暗譜で弾くのはもう習慣

——1月29日のコンサート、素晴らしくて、ビックリしました。日本で2人は一気に有名になったのではないですか。

Y どうもありがとう。
V そうなれたら、とてもうれしいですね。

——2人はこれが初来日ですが、印象はどうですか？ 講習会やコンクールでは、多くの日本人ギタリストに接したと思いますが。

Y コンクールでは、すごく上手い若者が多いのに驚いた。第2位の子なんてまだ16歳でしょ？ それに、ソルやジュリアーニ、レゴンディなどを弾く人が多かつたから、みんなクラシック音楽が好きなんだなと思った。日本にも、クラシックギター文化というものがとても深く根付いているとわかって、とてもうれしいね。

V 私も、コンクールはすごくハイレベルだと思いました。参加者はみんなそれぞれ違う曲を弾いていて、バラエティも豊かだったし…。講習会でも、とても上手な、良い受講生が多くいたと思いますね。

——コンサートでは、プログラムが古典から現代曲までと幅広いのも印象的でしたが、いつもそうしているのですか？ 特定の時代の音楽に限ったりはせずに…。

Y コンサートによってはバロック音楽を中心に入れたり、ソルを中心に入ったり、ということはある。でも、それだけに絞ってしまうことはしないね。たとえば第1部をソルでまとめたとしたら、第2部では違う時代の曲を弾いたりとか。そのほうがお客様も楽しめるだろうし、私たちも楽しい。あるいは、テーマをフランス音楽にするなら、ラモーのようなバロックからロ



Y 2人です。原曲を何度も聴いて、意見を出し合ってながら、いろいろと音を出してみたりして、その効果を確認しながらやっている。スカルラッティ、アルベニス、フォーレ…。

デュオのためのオリジナル曲でも、たとえばソル《幻想曲 op.54bis》は、ずっと片方がメロディーで片方が伴奏という感じだから、パートを入れ替えたりして手を入れているんだ。そのほうが効果的だし、伴奏だけを覚えるのはすごくツライから（笑）。

——ほかの古典曲でもそうするのですか？

Y いや、カルッリやジュリアーニ、ロイエ、メルツなどの2重奏曲は、たいてい効果的に入れ替わる

ように書かれているから、その必要はないね。ソルでも《ロシアの想い出》はそのまま弾いているし。

——協奏曲のレパートリーはどうですか？ たとえばC=テデスコなどが2台のギターのための協奏曲を書いていますが。

Y ロドリーゴ《マドリガル協奏曲》は弾いています。C=テデスコのものもいざれ弾きたいね。ただ、オーケストラと共に演奏できる機会はなかなかないのが残念だけれど。

同じギターを使うほうがいい

——そもそもデュオ・パリサンドルという名前の由来は？

Y 最初は2人の名字を並べて、「ダルティエ&デュフレーン」と名乗ったりしていたんだ。でも、それだと難しいのか長すぎるので、みんなに覚えてもらえないかった。

V あるピアニストが、2人とも同じ製作家のパリサンドル材のギターを使っているから「デュオ・パリサンドル」で良いんじゃないかって言ってくれて、それで決めました。そうしたら、わりとみんなにも覚えやすかったです。

Y でも、パリのギターフェスティバルに出演した時のことなんだけれど、演奏を終えてホテルに行ったら、宿泊者名簿に「ムッシュ・パリサンドル」「マダム・パリサンドル」って書かれていたことがあった（笑）。

——どんなきっかけでデュオを組んだのですか？

V 結成したのは1998年なのですが、当時はまだ学生でした。それまでにも、たまに一緒に弾いてみたりしたことはありました。

Y マルコ・メローニの講習会とかでね。一番最初にやったのはロビンソン《鐘による20の変奏 Twenty



りませんでしたか？

Y それはない。私もマルケスの講習会に参加したり、ヴァネッサもシャニヨーのレッスンを受けたりしているし、一緒にピエッリに習いに行ったりもしたからね。それに、私はシャニヨーにはそれほど長くは習っていないんだ。音楽的には、ガルシアレナからほとんどのことを授かったと思っている。

——2人ともジョージ・ローデンGeorge Lowdenのギターを使っていますよね。なぜアイルランドの製作家の楽器を使っているのですか？ フランス人なのに（笑）。

Y 良い質問だね（笑）。今ストラスブール国立音楽院で教えている、マルケス門下の辻英明さんというギタリストがローデンを弾いていたんだ。それを聴いて、良いなと思っていた。そして、クリスティーナ・アズマが一時期ボルドーの隣の町に住んでいたんだけど、彼女が自分の楽器を売りたがっていて、それがローデンだった。そこでそれを買って…。

V その楽器は私が使っています。

Y そして、私も同じ楽器がほしいと思ったから、新品を買ったというわけ。

——デュオでは、やはり同じ製作家のギターを使うほうがいいですか？

Y そう思うよ。ただ、ヴァネッサのと私のは内部の構造が違うんだ。ヴァネッサのは普通の、クラシカルな構造のものだけれど、私のは力木をクロスさせてあるようなもの。だから音は違う。

でも、やはり製作家のキャラクターは出ていて、音の出方、音の持つ心には同じものがあるんだ。まったく同じ構造である必要はないけれど、同じ製作家のギターであることはすごく大事だと思うね。

2人ともオペラが大好き

——今はボルドーのほうで教えているのですか？



Y そうだね。私はブリュージュ Bruges とル・ブスカ Le Bouscat の音楽院で教えている。

V 私はリブルヌ Libourne で教えています。

Y 残念ながら日本人留学生はいないね。ボルドーのほうには来ない。パリには多いけど（笑）。

——今後のコンサートなどの予定は？

Y ボルドーのオペラハウスに所属するテノール歌手との共演で、スペインをテーマにしたコンサートをする。彼とは録音もするかもしれない。ロルカやファリヤの曲をやることになっているんだけれど、デュオとしてロドリゴ《トナディーリヤ》やグラナドス《詩的ワルツ集》なども弾く。

——3作目の予定はありますか？

Y 3作目？ 3人目の子供っていうこと？（笑） というのは冗談、CDの話だよね。もちろんある。フランス音楽だけで1枚作ろうと思っている。

V ラモーやクープラン、ドビュッシー、フォーレ、ボルドー出身の作曲家フランソワ・ロセ Francois Rosse…。

Y 録音はこの夏かな。たいてい夏に録音することが多いね。バカンスシーズンで学校の授業がないから、落ち着いて取り組める。

——それぞれデュオ以外の活動はしているのですか？

V していますよ。私は去年、マンドリン2台とのトリオでCDを出しました。フランスの現代作曲家が書き下ろしてくれた曲などが入っています。それに、C=テデスコのピアノとギターのための曲を弾く予定があります。

Y 私はフルートと多くコンサートをやっている。そこではマシャードの曲をよく弾くね。ほかにはタンゴ・クインテットもやっていて、ヴァイオリン、コントラバス、バンドネオン、ピアノ、ギターというオリジナル編成でピアソラの曲を演奏したりしているんだ。

——趣味はありますか？

V ヨットですね。2人で乗ります。

Y それに私たちは2人ともオペラが大好きで、よく観に行く。オペラの曲を歌ったりもする。歌うことは、楽器を弾く上でもすごく大事だね。フレージングと呼吸の関係をギター演奏にも生かせるようになるからね。

それに先ほども少し言つたけれど、私は歌うのが好

きだから、よくルネサンス時代の歌をリュートやフルート、ハープ、パーカッションなどの古楽器と一緒に歌うんだ。コンサートをやる機会まではなかなかないけれどね（笑）。

——では最後に、読者にメッセージをお願いします。

Y 今回、日本の皆さんにはすごく親切にしてもらつた。どんな時でも歓迎してくれているのがわかるんだ。コンサートでも講習会でも、誰に会つても、それこそ道を歩いていてもね。私はそれがすごくうれしかった。心からお礼を言いたい。

V 私も同じですね。ギタリストのレベルの高さはもちろん、日本の製作家が作ったギターも印象的だったし、どこでも歓迎してくれて、とても楽しく滞在することができました。どうもありがとうございました。



去る1月27日から29日までの3日間に渡って、第2回イーストエンド国際ギターフェスティバルが東京で行なわれた。昨年より始まったこのフェスティバルは、今回は3日間とも江東区にあるティアラこうとうを使用して行なわれ、昨年のように会場が日によって変わることがなく、とても参加しやすくなつた。「日本のギター界を世界水準に引き上げたい。ギターを学ぶ地として、日本もその候補にあがるようにしたい」という意気込みで、ギタリスト樋浦靖晃が個人で立ち上げたこのフェスティバルは、ゲストによるコンサートとマスタークラス、そしてコンクールが行なわれる充実の3日間。その様子を順を追つて紹介したいと思う。

FESTIVAL REPORT

第2回イーストエンド

The 2nd East End International Guitar Festival

国際ギターフェスティバル

レポート＝玉置義弘

写真＝東 昭年、tama

今回のゲストには、フランスからジュディカエル・ペロワと、ヴァネッサ・ダルティエ、ヤン・デュフレーンの2人からなるデュオ・パリサンドル、アルゼンチン出身で現在は東京に住むレオナルド・ブラーの4人が招かれた。ペロワとデュオ・パリサンドルは初来日。ブラーの出演は、当初予定していた稻垣稔が病気のために急遽決まつた。

フェスティバル初日の27日は、ペロワとデュオ・パリサンドルによるマスタークラスが、ティアラこうとうの小ホールとレッスン室で行なわれた。今年の受講者にコンクール入賞者の顔が多く見られたのは、昨年に比べこのフェスティバルが広く認知されたからかもしれない。夜のコンサートにはレオナルド・ブラーが登場。彼の持ち味を十分に出し、アルゼンチンの音楽の楽しさを存分に聴かせてくれるコンサートだった。タンゴの的を射た洒落た感じなども見事と言うしかない。演奏プログラムは、コンサートレポートのページを参照していただくとして、ブラー編《3つのタンゴ》などでは、《黒い花》《想いの届く日》《軍靴の響き》というよく知られた曲を見事にブラー流に料理し、聴く者を魅了した。

28日は午前10時より第2回イーストエンド国際ギターコンクールが行なわれた。今年も予選はなく、さらに昨年あった課題曲もなくして、12分以内の自由曲のみで競われた。審査員は、審査委員長ブラーのほかダルティエ、デュフレーン、奥村浩一（指揮者、作曲家、音楽学者）、竹内永和（ギタリスト）、久隆信（作曲家）、脇屋弓子（バイオリニスト）の7名。

今回は18名の参加者があり、やはりほかのコンクールの入賞者の顔も多く見られた。そして、昨年の東京

